

移民の医学史への展望

——中野卓・中野進共編『昭和初期一移民の手紙による生活史——』
ブラジルのヨッチャン』(京都・思文閣出版、二〇〇六)に思うこと

鈴木 晃 仁

慶應義塾大学経済学部

移民という問題は、現代世界が直面している大きな課題の一つである。国連の推計によれば、二〇〇五年には世界に約一億九千万人の移民がいる。これは世界の人口の三%にあたり、必ずしも大きな割合とは言えない。移民の問題が重要なのは、移民の数そのものよりもむしろ、それが現代世界の根本的な構造に突きつけている意味の大きさによる。グローバルイゼーションが急速に進展する現在、国際労働市場をどのように自由化し、どのように規制するのか。移民が現地の市民権を獲得できる基準をどのように設定したらいいのか。移住先での移民と現地人の間の文化的・社会的な摩擦をどのように解消するのか。このような問題の起源の多くが、一九世紀以降に広まった「国民国家」の枠組みにあることは言うまでもない。現在の「国家」は、ある物理的な

国境で囲まれた地域において、均質な市民権を持った「国民」の集合体として定義されている。そして、おのの国境の中で市民権を付与する権利を独占している国家が集まって、国際社会が作られている。このような枠組みのもとでは対処することが難しい問題を、移民という現象は突きつけている。すなわち、移民の問題を論ずることは、グローバルイゼーションの趨勢の中で、国家と民族と文化・社会の関係を再定義する方策を考えることに他ならない。

そう考えると、現在の人文社会科学において、移民の問題が大きな注目を集めているのも当然であろう。試みに国会図書館のOPACのタイトル検索で「移民」と入力すると、一九九〇年以降で五三二件、二〇〇〇年以降だけで二一二件の和図書がヒットする。移民の問題は現在最もホットなトピックであり、この問題をめぐる議論が止むことは当分の間はないだろう。それどころかむしろ、既にこの問題に長く取り組んできた欧米諸国とは対照的に、いまだ移民の問題を十分に議論していない日本においては、移民をめぐる論争はこれから本格化するのだろう。日本の医療の現場もこの論争と無縁でないことは、先日発表された、二〇〇七年以降にフィリピンから看護師・福祉介護士を受け入れる政策が象徴している。

現場の医学だけでなく、少なくとも欧米においては、医学史も移民の問題に取り組んできた。医学図書館のカタログを眺めると、やはり一九九〇年代から、現代における移民の問題への関心の高まりを背景にして、医学史における移民の歴史の研究が活発化したという印象を受ける。ロンドンのウェルカム医学史図書館のカタログで、「Emigration and Immigration」のキーワードを入力して調べると、同図書館は一九九〇年以降にその主題に関連する一七四件の書物などを受け入れている。医学史における移民の問題の研究は、一つの流行であると同時に時代の要請でもあるのだろう。現代の世界にとって重要な問題が、学術的な歴史研究の主題選択に影響を与え、我々の歴史の見方に投影されることは、それ自体の良し悪しはともかく、避けられないことである。むしろ、そのこと

は、医史学研究が閉塞していないことのリトマス試験紙なのかもしれない。「あらゆる歴史は現代史である」というクローチエの言葉は、少なくとも一片の真理を含んでいる。

近年の欧米における医史学が多様な方向に発展していることを背景にして、医史学における移民研究も多様なトピックを扱っている。まず筆頭に上げなければならないのは、一九七〇年代にウィリアム・マクニールが開拓し、クロスビーやカーティンなどが業績を上げていた生物学的な移民の歴史という主題である。彼らは、農耕と人口集中が人類の健康に与えたインパクト、免疫の地理的な不均衡による移民の成功と原住民の駆逐、近代的薬学や公衆衛生対策によってヨーロッパ諸国が熱帯地域で大規模な軍隊を行動させることが可能になったことのインパクトなどを明らかにしてきた。長大なタイムスパンで地球的な主題を語る壮大なグローバル・ヒストリーは、ジャレード・ダイアモンドの国際的なベストセラーにも助けられて、移民の「生物学的な歴史」の大きな成果として、現代人の常識になりつつある。

この生物学的な歴史と並行して、移民に関する行政と結びついた医学の歴史の研究も進んでいる。この分野で目につくのは、移民が入国・入港するのを検疫する移民局・検疫所などの豊かな資料に基づく研究である。細菌学の全盛時代の移民局が、外国から移民によって持ち込まれる感染症の国内流行を阻止するために活発な活動を行ったことは知られている。近年の研究は、そういった活動が、「国民」を守ると同時に、「国民」でないものを峻別し、あるいは国境の中に居住している住民の中に感染症のリスクに応じた階層を作り出したことを明らかにした。大西洋を渡って東欧や南欧からアメリカに入国した移民をめぐるのは、ハワード・マークエルが一九九七年の著作で取り上げた。一八九二年にニューヨーク市は、大西洋を越えて持ち込まれた感染症の流行（一回目は発疹チフス、二回目はコレラを二回経験したが）、マークエルの著書は、この事件に現れた移民をめぐるアメリカの態度の複雑さを明らかにした。アメリカの太平洋側については、ニアン・シャヤーが二〇〇一年に大きな著作を発表した。日本

とも縁が深い一八九九年のサンフランシスコにおけるペストの発生を含めて、太平洋側の中国人移民の位置づけの変遷を、医学的な検査を軸にして跡付けた優れた研究である。ヨーロッパにおいては、ポール・ワインドリングの話題作を上げることができる。ワインドリングの著作は、ドイツが二〇世紀の初頭から東欧地域との国境で行なっていた発疹チフス対策の検査と消毒が、ホロコーストのモデルを提供したという強力な議論を提出した。この議論の当否はともかく、移民への対策は、二〇世紀を覆う主要な問題の一つである「人種」の問題形成に大きく貢献していることが明らかにした点では、ワインドリングの議論は他の多くの著作と方向を共有している。

上記の研究は感染症にまつわる移民の医学史研究であるが、その一方で、民族的な「体質」概念の歴史研究も成果を挙げている。マーク・ハリソンは一七世紀から一九世紀までの長い期間に渡るイギリスのインド進出にまつわる医学思想を検討し、イギリス人のインドの風土への順応可能性についての考え方が一八〇〇年近辺を境にして大きく変わったことを論じている。かつては、イギリス人はインドの気候に順応できるという考え方が大勢を占めていたのに対し、一九世紀には悲観論が台頭したとハリソンはいう。イギリス人の体質とインド人のそれは根本的に違い、前者はインドの気候風土のもとでは恒常的な不健康を経験するというのだ。逆説的なことに、イギリスのインド支配は、気候馴化の可能性についての悲観論のもとで遂行されたのである。一方で、期間はごく短い、日本の帝国主義の枠組みの中の医学研究においても、南方への植民に関して気候馴化の研究が大々的に行われたが、そこでは大東亜共栄圏建設の威勢のよい掛け声に乗った楽観論の医学研究が大半を占めた。この違いが、時代的な違いなのか、国家の政策に全ての科学研究が吸収されるファシズムのあり方によるものなのか、それとも日本の帝国主義においては、「人種」概念が果たした役割が小さかったからかは、今後の研究の課題である。

今回出版された、中野卓・中野進共編『昭和初期一移民の手紙による生活史——ブラジルのヨッチャン』（京都・思文閣出版、二〇〇六）は、日本における移民の医学史研究の新しい可能性を示唆する書物である。移民の

医史学研究に利用できる資料にはさまざまなものがあるが、その中でも最も異色で貴重なものが、移民その人たちの手紙や日記の類であることは疑いない。本書の主人公である中野義夫は、一九〇七年に京都の開業眼科医のもとに生まれ、一九二八年にブラジルに渡り、一九六九年に同地で没している。この間の、義夫とその家族らが日本の家族・親類縁者と交わした手紙が、本書の中心をなしている。このタイプの資料は、移民たち自身が異国で経験した病氣と医療に関するヴィヴィッドな記述を含んだ貴重な資料であることが多い。中野の手紙も期待に違わず、到着後まもなく中野がフェリダーという現地の風土病の一種にかかったこと、村の日本人会で頼んでいる医者に血膿を取ってもらったがそれでも病状は思わしくなく、七〇キロ離れた街にある外科医に手術をしてもらったこと、この手術代、入院代、宿泊代などは移住したばかりの中野家に大きいのしかかり、国許に送金を頼んだことなどが記されている。一九三八年には、農園で雇った季節労働のイタリア人の子供が腸チフスにかかったこと、予防注射をしたにもかかわらず二人の娘が次々と腸チフスにかかって一ヶ月も寝込んだことなどが記されている。あるいは、妻が嘆いている中野の大酒呑みも、移民にありがちな医学的な問題だという論者もいるかもしれないし、柔道の名手であった中野がほねつぎを開業したというエピソードも面白い。

このような情報は、そのままでは断片的な情報にすぎない。しかし似たようなタイプの資料が多く集められて分析されたとき、あるいは同じ移民に関する資料でも違うジャンルの資料（例えば植民地医学の担い手の記録）と比較べられたとき、日本の「移民の医史学」に貢献する可能性がある。移民の生活史や、外国で開業した日本人医師の記録など、全国のおちこちの個人に蔵されている資料が、この書物をきっかけに日の目を見ることを願う。

文献

- (1) W・マクニール『疫病と世界史』佐々木昭夫訳（東京、新潮社、一九八五）；アルフレッド・クロスビー『ヨーロッパ 帝国主義の謎』佐々木昭夫訳（東京、岩波書店、一九九八）；Philip D. Curtin. *Death by Migration: Europe's Encounter*

with the *Tropical World in the Nineteenth Century* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989). 1) 19世紀の研究が K. F. Kiple ed. *The Cambridge World History of Human Disease* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993) にちよびついでに集大成を見る。

(2) Howard Markel. *Quarantine! East European Jewish Immigrants and the New York City Epidemics* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1997).

(3) Nyan Shah. *Contagious Divides: Epidemics and Race in San Francisco's Chinatown* (Berkeley: University of California Press, 2001); Amy L. Farchild. *Science at the Borders: Immigrant Medical Inspection and the Shaping of the Modern Industrial Labor Force* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2003).

(4) Paul Weindling. *Epidemics and Genocide in Eastern Europe, 1890-1945* (Oxford: Oxford University Press, 2000).

(5) Mark Harrison. *Climates and Constitutions: Health, Race, Environment and British Imperialism in India, 1600-1850* (Oxford: Oxford University Press, 1999).

(6) 筆者の乏しい経験の範囲では、一九世紀にマルチニークで砂糖プランテーションを経営していたピエール・ドサールの日記・手紙は、自身の病気を現地人の医者にかかったことなどが記されている興味深い資料である。Elborg Forster and Robert Forster ed., *Sugar and Slavery, Family and Race: The Letters and Diary of Pierre Dessales, Planter in Martiniques, 1808-1856* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1996).